

飛鳥の石造露盤調査報告

長谷川 透

はじめに

飛鳥地域では以前から定林寺と奥山久米寺に石造露盤が存在することが知られていた。聞くところによると、飛鳥寺周辺にも未報告の石造露盤が飛鳥大字の民家にあることを知り、所有者の許可を得て、石造露盤の熟覧と実測調査を実施した。折しも、飛鳥資料館では、令和元年度秋季特別展『飛鳥 - 人と自然と』では、定林寺出土の石造露盤が展示され、具に実見する機会を得た^{〔註1〕}。近年、古代の石造露盤についての研究が進み、類例が増えている。なかでも、飛鳥地域の石造露盤はいずれも初期寺院で確認され、日本における石造露盤の出現を考える上で重要である。本稿では、新たに知り得た飛鳥寺周辺の石造露盤とこれまで詳細が知られなかった奥山久米寺例について調査報告を行うものである。尚、今回報告する飛鳥の石造露盤の位置付けと比較検討については別稿を用意している^{〔註2〕}。ご参照頂きたい。

I. 飛鳥寺と奥山久米寺の石造露盤

飛鳥寺の石造露盤 石造露盤は江戸時代創建の来迎寺の境内に手水鉢として置かれている。



図1 飛鳥地域における石造露盤関連位置図 (1:3000)

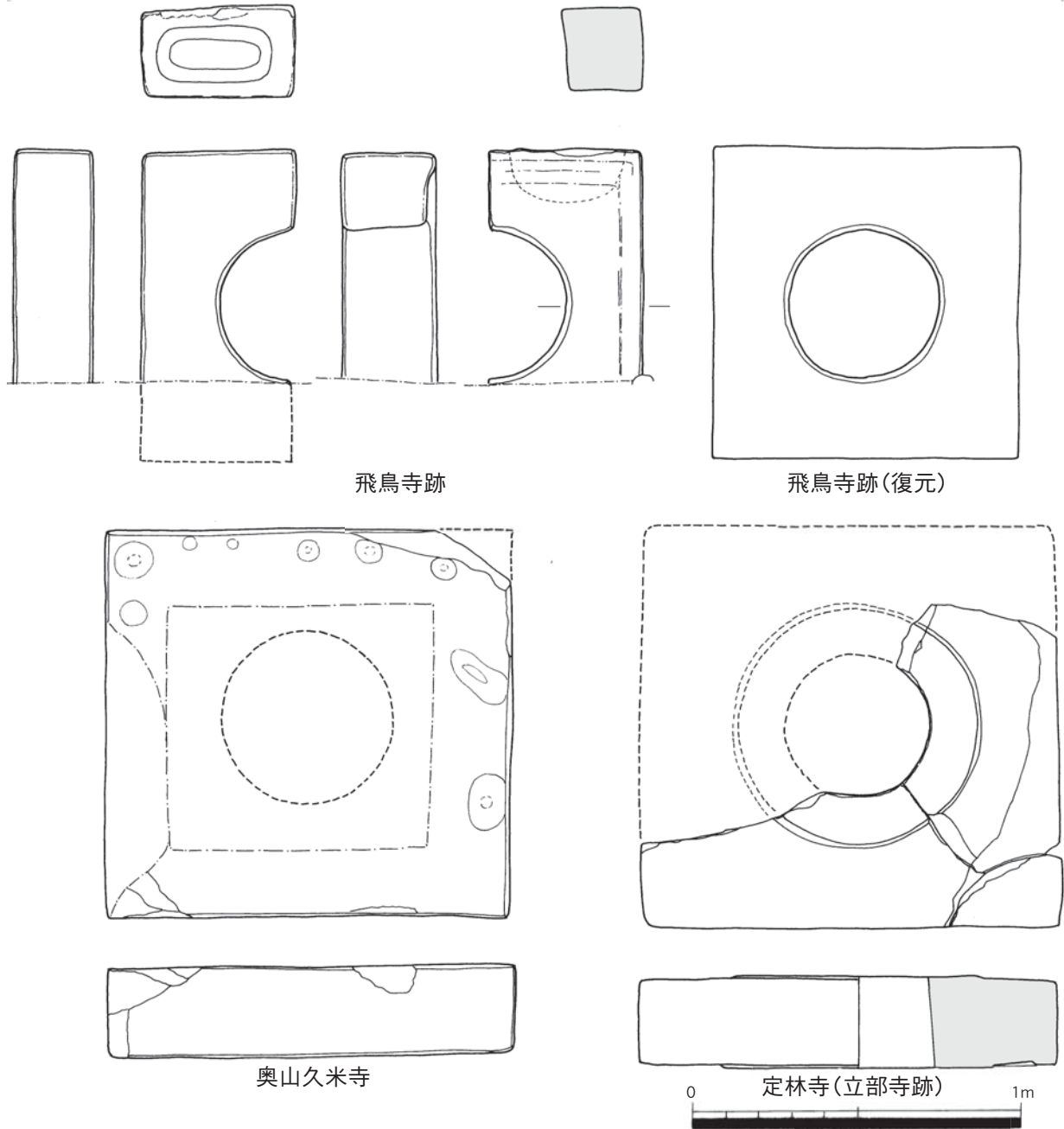


図2 飛鳥地域の石造露盤 実測 (1 : 20)

[定林寺例は大脇 1984 を再トレース]

半円形の切り込みが北側に向けて置かれている。この半円形の切り込みが露盤中央の円形貫通孔である。露盤中央に開けられた円形貫通孔の直径は、東面で45cm、西面で47.5cmある。貫通孔の断面形は、西面に向けてわずかにハの字状に開く。貫通孔の表面には石材加工痕が明瞭に残る。おなじく西面の表面にも石材加工痕が残るが、東面や南面には加工痕はなく、平滑に整えられている。石材に残る加工痕跡からみて、東面が露盤上面、南面と手水鉢面が露盤側面、西面が露盤下面であったと考えられる。西面には上辺縁部から4cmのところまで沿って幅7cmの溝状の切り込みがあり、側面にも側辺縁部から7cmのところまで幅1.5cmの溝状の刻み

がある。手水鉢の刳形は、長さ 35cm、幅 17.5cm、深さ約 16cmである。現状で露盤の残存高 69.5cm、上辺の長さ 46.8cm、上辺の幅（厚さ）は南辺で 27cm、北辺で 29cm。円形貫通孔から四辺までの長さは、それぞれ 24cmと均等である。下辺部分は土中に埋もれているが、現状から造立当時の形状と規模を復元すると、一辺 93～94cmの方形であったと推定される。石種は竜山石と考えられる。

奥山久米寺の石造露盤 塔跡に立つ鎌倉時代の十三重石塔の基礎石として転用されている。基礎石の下に手を差し入れたところ、中央に孔が開いており、石造露盤であることは明らかである。平面形は正方形で、一辺長 121～124cm、厚さ 27cmである。中心の円形貫通孔は、手探りであるが、円形を呈する。隙間からメジャーを差し込んで、当りのあるところで計測した結果、円形貫通孔の径は推定 50cmである。上面には多数円形の窪みがあるが、十三重石塔の塔身の屋根から落ちた雨落ちの痕跡とみられる。南西隅は欠けているが、石造露盤の残存状態はよい。側面には加工痕がよく残る。石種は竜山石と考えられる。

II. まとめ

これまで飛鳥地域では、定林寺の石造露盤についてその詳細が知られるのみであった。今回、飛鳥寺と奥山久米寺の石造露盤を報告することにより、飛鳥の初期寺院における塔相輪の一端を垣間見ることができた。国内では、石造露盤の管見事例が増え、比較研究が進められている。今回の報告がその一助となれば幸いである。

註

- 1) 資料の実見には飛鳥資料館の石橋茂登氏、西田紀子氏にお世話になった。

【参考・引用文献】

飛鳥資料館 2019 『飛鳥－自然と人と－』

大脇潔 1984 「定林寺石造露盤の調査」『奈良国立文化財研究所年報 1984』